●金沢大学ワンダーフォーゲル部OB会・会報誌「やまざと」VOL.19――山小屋・ベルクハイム・マイホーム号

やまざと

特集　ぼくらにとっての「山小屋」考

近畿KUWV-OB会の歩み

～～8期 篠島益夫徹底レポート～～

最新・住所録 完全保存版（2005年1月）

リスのコーヒー屋さん「ブナブレンドはいかが？」

21期　竹中　敏（イラストと物語）

晩秋のある晴れた日、いつもの森へ出かけた。昼下がり、目的の小屋までの歩きも残りわずかとなった。

目印のブナの根元に、見覚えのない踏み跡が森の中へ続いているのが見えた。チョッとさまよってみようと思い、その踏み跡をたどってみた。

キツネやテンが歩いた跡だろうか？しばらく行くと大きな倒木が苔むしていた。ここまで、けっこう歩きつづけてきたので、休憩することにした。

テルモスを取りだし、カップに暖かいコーヒーを注ぐと、ゆらゆらと立ち上る湯気があたりにひろがった。なんとなく眠くなってきたので腰をおろした。倒木に背をもたれているうちに、記憶が遠のいていくのがわかった。

夢を見た。

大木の根元に、大きな鈴がかかったドアのコーヒー屋があった。なんとも香ばしい香りに誘われてそのドアをくぐった。カウンターには蝶ネクタイを付けたリスがお客を待っていた。

「とてもいい香りだね。」と言った。

「このコーヒーはうちの特製だよ。ウラヤマのドングリをローストしていれたんだ。クヌギやブナの実をブレンドしたものもお勧めだよ。」

「じゃあ、そのブナをブレンドしたものを1杯たのむよ。」

しばらくすると、もうもうと湯気の立つカップを差し出してくれた。

「やけに湯気がでるなあ。いくら？」と聞いた。

「クルミ3個です。」

「クルミ？」

ポケットをさぐると、なぜかクルミがごろごろしていた。

ころころっとクルミが床にこぼれた。

「あ、いけない。」

ごそごそと床を手探りでさがした。

ごそごそ、がさがさ。

コーヒーカップのむこうにゆれる、ふさふさシッポは夢ではない。

「やまざと」VOL. 19　山小屋・ベルクハイム・マイホーム号

〉〉〉 CONTENTS

表紙　リスのコーヒー屋さん——21期・竹中　敏（イラスト＆文）
やまざと　題字——— 23期・中川晃成（毎号イラストに合わせて執筆）

01p　**特 集　ぼくらにとっての「山小屋」考**
02p　建設当時の思い出——6期・合津　尚
03p　二代目山小屋おやじ雑感——13期・吉田穂積
04～05p　ベルクハイムとの付き合い——13期・辰野隆義
06～07p　ベルクハイムの想い出——19期・栂　典雅
08～09p　再会　ベルクハイム——22期・森　恵利子
10～13p　山の開拓者たちを想う——11期・青柳健二
14p　山小屋　温故知新——15期・舟田節子

15p　**メール宅急便「寄 稿」**
16p　半世紀越しの飯豊山——6期・合津　尚
17p　北漢山・トボン山（韓国）山行——9期・山中重夫
18～19p　姿を変えた百四丈滝　15期・上馬康生
20～22p　八ケ岳（赤岳）登山——4期・佐藤秀紀

23～31p　**近畿KUWV-OB会の歩み**——8期 篠島益夫徹底レポート
32～33p　**近畿OB会 晩秋・多紀連山PW**——15期・宇野　潔

34p　**野沢温泉スキー合宿'04　報告記**
35p　**野沢温泉スキー合宿'05　予告記**——11期・青柳健二

36～37p　**やまざと写真館**——8期・柴田勝幸　11期・青柳健二

38～39p　**前田先生 法学部長お祝い会**——21期・栂　睦美

40～41p　**2004年 OB会会計報告**——23期・鳥越伸博

42～43p　**OB一言通信**

44～67p　**最新・住所録 完全保存版**（2005年1月現在）——23期・名倉　均

特 集
ぼくらにとっての「山小屋」考

山小屋の窓から細くたなびく 食当のけむり
道作りの作業を終えて帰り着くベルクハイムは
わが家そのものだった
ヘッドランプのもとで食べるカレーライス
たとえカメムシがアルミの食器に飛び込んできても
「ベルクハイムやから…ね」と、笑って許せた
たまらなく懐かしい場所
ボクの胸の奥の奥には、今でも
「ベルクハイム」という部屋がちゃんと陣取っている

建設当時の思い出

６期　合津　尚

キセキレイ

昭和も遠くなりましたが、昭和３８年(1963年)冬は記録的な大雪でした。この当時には倉谷の集落に多くの人が生活しておりましたが、往来が遮断され社会問題となりこの年に廃村が決定された。

一方、我らがホームグランドとしていた医王山の周辺の民有地では、入山料を取り始める騒ぎとなった（今はどうなっているのか？）。当時のクラブは創設間が無い時期でしたが部員数が多く大変に活気があり、この事件があって常時アプローチが可能な山域と山小屋に対する夢が語り始められました。

このような背景と６期の無謀で授業に飽きた輩が一大決心をし、山小屋建設に動き出したのが３８年頃であったように記憶している。候補地の選定として主たる山の近くで、借地問題が少ない国有林であることと雪崩と洪水の危険が無いこと、交通の便があり街から程ほどに近いこと、建設資材の搬入が可能なこと、更に水場が近いことなどなど。このような条件に合致したのが高三郎山の麓にある倉谷の集落跡であった。

問題の資金はＯＢ諸氏からのカンパと(歴史浅くあまりあてにならず)、白山に素人学生を案内するクラブのバイトなどが主な資金源で、こうした浄財１４～１５万が建設資金であったと思う。資金不足を補うための工夫として資材は現地調達方式とした。まず無料の河原の石で土台と腰壁を構築し、これもタダの砂と小石と水と有料のセメントでコンクリートを作り、建物の主要部は廃村になった民家一軒を市役所から払下げ解体して木材を回収したもの。夏休みの勤労奉仕でオロロと戦いそれぞれ苦労したが、特に合掌作の大きな民家の解体は素人の集まりにしては事故もなく良くやったと今でも感心する。今の時勢なら足場、安全帯、ヘルメット等〃と規制で大変なことだが、それからだんだんと解体が進むと家の住人(ヘビ)が大量に出てきたのには驚いた。

資材不足と豪雪対策で建物は腰壁の上から直にトラス組の三角屋根を被せた構造とした。内部空間は狭くなったが、当時の豪雪のイメージからすればこれしか策が見つからなかった。４０年の卒業の春に雪の中に押潰されない小屋を見たときは安心とともに感動に浸ったことが思い出である。

二代目山小屋おやじ雑感

13期　吉田穂積

石川県内在住の13期が、毎年正月にお決まりの小料理屋で会食しています。8年程前のその場で辰野が「たまには忙しい毎日から離れて、ベルクハイムへ行ってゆっくり休みたい。その為には快適に過ごせるようにしたいし、山小屋整備のお手伝いにもなれば」と言いだしたことから、13期が山小屋作業に関わるようなりました。それ以来多くの人の協力で、水場、トイレ、床張りなど整備ができ、快適空間になりました。

ある時、送られてきた『やまざと』16号を見ていたら「3月から東京勤務となります。よって二代目山小屋のおやじは穂積に頼んで行きます」の文字が目に入ってきた。辰野から舟田さん宛のメールだった。転勤の話は辰野夫妻と我々夫婦が飲みに行ったとき聞いてはいたのだが。「はぁー？」と思ったが東京に行ってしまうんならしょうがないな、というわけで二代目ということになってしまいました。

これまでの山小屋作業で、当初辰野が予定していた重要な整備箇所はほとんど済んでいるので、後は必要に応じた修繕と、少々の楽しみ、便利になるような作業になるかなと思っています。

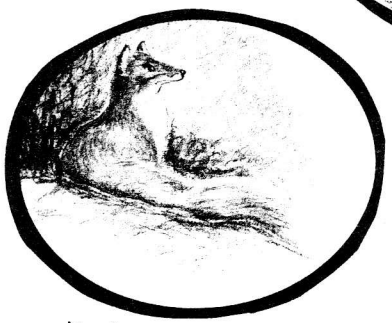
ベルクハイムの履歴を見てみると

- 1964年　初代BH完工
- 1974年　2代目BH完工
- 1987年　床に穴あく
- 1991年　屋根に穴あき床1/3が使用不能
- 1993年　屋根葺き替え
- 1994年　床張り替え
- 1999年　屋根塗装
- 2000年　床張り替え

と10年余りで大修復か、その兆候が現れている。その兆候に適宜対処して、せいぜい一泊程度の修繕作業を楽しみながらやることでベルクハイムが永くもってくれればいうことはありません。

その時々の山小屋作業には、これをやろうという目的はありますが道の補修、草刈、小屋周りの清掃、食当など色々やることがありますので、皆さんそれぞれできることに応じてやって預ければよいのです。また消音水洗トイレが完備していますので、女性も安心して参加してください。山小屋酒場は年2回、5月中旬と9月下旬(変動あり)にやっております。

アオバズク



ホンドギツネ

ベルクハイムとの付き合い

13期生 （山小屋酒場初代おやじ） 辰野 隆義

私がベルクハイムと出会ったのは、1年の新トレでちらっと拝ませてもらったのが最初でした。もちろん泊まらせてもらえる訳もなく、"ワンゲルは山小屋を持っているんだ"という印象だけでした。

そんな山小屋がとても身近になったのは、1年の秋から2年にかけてだと思う。そのころ70年安保で大学は閉鎖状態。金もなく、暇だけある私たちは、よく誘い合い、シュラフと少しの食料を持って山小屋へ行ったように思う。その頃の山小屋は今の様式とは異なり、土台の石積みの上に直接屋根が乗っている様式だったと思う。中には囲炉裏があり小屋前には水場があった。小屋じまいには窓に板を打ち付け、水場からホースを巻きとり、結構大変な作業だった。

こんな懐かしい思い出も、卒業してからしばらくは忘れていた。ところが、20年ぶりくらいでOB会主催の"月見の宴"が山小屋で行われることになり、勇躍参加した。ベルクハイムはあまり使われている様子はなく、小屋の周りも荒れ果てていた。青春の一翼を担ってくれた山小屋も、このままにしておけば数年で倒壊してしまうのではないかと思われた。そこで、金沢在住の13期生3人（大島、吉本、吉田君）に相談し、我々だけで、手弁当で山小屋を整備しようということになった。ちょうどその頃、大島君は初代のOB会長を務めており、そこから舟田事務局長の耳にも入り、OB会の行事 としてやろうということになった。山小屋酒場という名前を付けたのは私ですが、その名の通り気楽に中年オヤジの道楽程度の考えがスタートの基本だった。

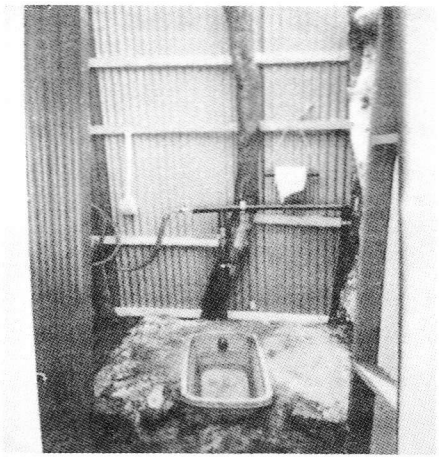
昔、同じ空間を共有した気の置けない仲間が山小屋に集まって、自分のできることをし、夜は酒を飲んで、昔を語り合い、近況を話し合う。なんとすばらしい空間ではありませんか。この空間が少しでも長く、みんなと共有できるようにと、春と秋の山小屋酒場のお手伝いをさせていただいています。

当初の目標は、最終的に"囲炉裏を作ること"でした。囲炉裏というのは直接生活に必要ないけれど、欲しいものということで、補修が一段落したら手掛けようと思ったからです。

まず、手掛けたのはアプローチの整備からでした。登り口の階段を整備し、小屋の周りの溜まりに溜った残材、ゴミを焼却すするなど、外部から取りかかりました。倉谷の古い梁材で昔創った "愁心"の碑（※1）が朽ちてしまっていたので、コンクリートで作り直すことも真っ先に手掛けました。

外周りが綺麗になった後、まず1年かけて水場の整備を行いました。必要なところから優先的に手を付けるという考えです。次は、部分的に腐っていた床の張り替えです。今までの合板より、やはり白木の単板が良いという意見から、150枚余りの白木の板材

を準備しました。この床張りに1年。さらに次は念願の水洗便所の作成にとりかかりました。山から柱や梁になる木を伐り出すところから始まり、組み立て、トタン張り、便器据え付け、コンクリート打ち、配管等、2年をかけて完成しました。



これにより誰でも気楽に山小屋が使えるようになり、ぐっと居住性が良くなりました。その後しばらくは老朽化の対応に追われました。屋根を支えるトラス材の腐食で柱を新設したり、土台のコンクリートのモルタルを補強したり、屋根の塗装替えをしたり、おかげで毎年何らかの作業が発生しました。そして、いよいよ昨年から囲炉裏の作成に取りかかり、今年の春"火入れ式"にまでこぎ着けました。

これで当初の目標は達成しました。しかし、まだまだ気を抜くとすぐに不都合がでてくるし、これからもやらなければいけないことが、いっぱい出てくるはずです。これからも、皆さんの力を貸して頂いて、1年でも長く、ベルクハイムを存続させたいと思っています。

これまで参加してくださった方々、大量の資材をボッカしてくれた現役の方々、それに、参加したみんなの胃袋を堪能させてくれた舟田さん、本当に有り難うございました。私は仕事の都合で 、現在、東京暮らしなので、おやじを吉田穂積君に替わってもらいましたが、できる限り皆さんと一緒に、ベルクハイムを盛り立てて行こうと思っています。これからもよろしく。

※1 愁心の碑：我々13回生がリーダーをした新入生トレーニング（高三郎を使用）で、当時の新入生だった桂君がダムサイト近くで倒れ、そのまま帰らぬ人となってしまった。
そのことを我々は深く心に刻み、2度とこのようなことが起きないようにとの思いを込めて、建設したものです。題字は当時の顧問の松尾先生に、パネルは教育学部の米林先生にお願いして作成していただいたものです。

ベルクハイムの想い出

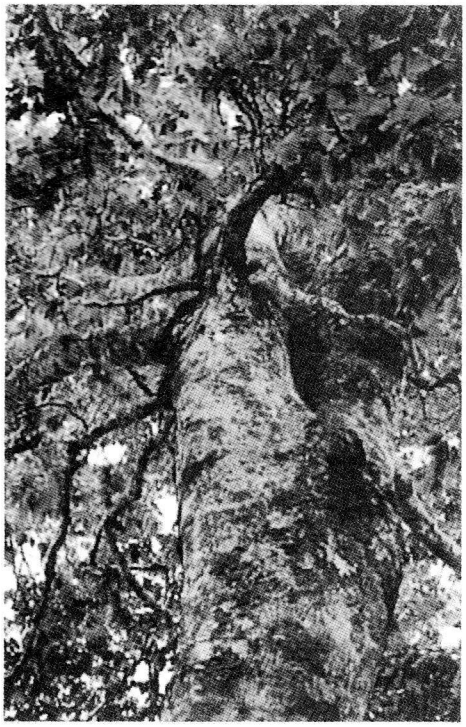
19期　栂　典雅

現在のベルクハイムが建てられたのは1974年、ぼくが現役１年生の夏である。初代のベルクハイムは、新トレのときに見たくらいであまり記憶にないが、旧倉谷の廃屋の材を梁などに使っており、10年経って老朽化したので建て替えるのだと先輩から聞いたことを覚えている。ということは、19期は初代のベルクハイムを知る最後の期だったわけだ。

改築は８月の盆過ぎから９月上旬にかけて行われた。工期を６日間ずつ４期に分け、１期は解体と屋根を支えるバットレスのコンクリート打ち、２期は骨組み、３期は屋根葺きや外装、４期が内装・仕上げといったような工程だったはずだ。

ぼくが参加したのは８月下旬からの３期だった。ダムの水かさが日に日に減り、それにつれてボートの荷揚げ場が遠くなるので、トタン板などの資材を運ぶのに苦労した。それに加えて恐怖のオロロ。最盛期はやや過ぎたとはいえ、炎暑の中、何百というオロロにたかられ、刺されながらの運搬作業はほんとうに辛くて、まるで強制労働を強いられる捕虜のような気分だった。４年生の川端さん（16期）が着ていた白いシャツの背中に、赤いマジックでオロロの絵と「働け！」という文字が書かれていた、などというしょうもないことを覚えている。しかし、後半は屋根が葺かれ、小屋の中で夕食を取ることができたのはよかった。厳しい労働の後のビールやウィスキーが最高だったことは言うまでもない。

以来、ベルクハイムは急速に身近な存在になったのであるが、今にして思えば、犀奥の登山道整備は、ぼくたちが現役の頃に最高潮に達していたのではないだろうか。大門山・奈良岳間の開通にとどまらず、奈良岳から大笠山に向かって道を延ばしていたくらいで、夏と秋の小屋作業（道づくり）には多くの部員が参加していた。ベルクハイムはその拠点であり、見越山北峰下には前進基地として、ワンゲル平（テン場）も整備されていた。[注＊]



ぼくが３年生の秋に「白山ーベルクハイムPW」をやれたのも、こうした背景があってのことで、実際、大笠山から奈良岳へ向かう途中で秋の作業隊と感動の出会いをしている。とどめはベルクハイムでの二十数名による祝宴。翌日、本当は帰りたいくせに、みんなを見送り、もう１泊した（このPWで13泊目！）。なぜ、そうしたのか、はっきり覚えてはいないが、自分を淋しさの極みに追いつめようという、ちょっと屈折した思いがあったと記憶している。

そして、ベルクハイムといえば、同期の高桑を決して忘れることができない。前述のPWで最初に「感動の出会い」をしたのも作業隊長の彼だったし、酒と歌を目的にした「小屋じまい」を共謀したこともあった。それが、ワンゲルOBになって間もない1978年の４月末、地学科の４年生だった彼は卒論の予備調査のために倉谷に入り、行方不明になったのだ。同行していた同期の辻からの連絡で、ぼくは現役４年生の栃尾、松下らと夜の犀川ダムへ向かった。

それから数日間、消防隊員とワンゲル部員・OB、高桑の親族らからなる捜索隊の基地として、ベルクハイムは大きな役割を果たした。しかし、懸命の捜索むなしく、高桑は倉谷川のダム湖底から、ダイバーによって発見されたのだった。

ぼくにとってベルクハイムは、若き日の楽しかったことや辛かったこと、そして切なく哀しい想い出がごちゃまぜになっている。それは、きっとぼくだけでなく、高桑を知る者が共に抱く心情なのかもしれない。

［＊］現在、大門・大笠山間は白山国立公園の登山道として富山県により整備されている。高三郎・見越山間は廃道状態。

再会　ベルクハイム

２２期　　森　　恵利子

ありがとうございました。
ずっとずっと行きたかった、ベルクハイムと高三郎に
何とか無事に行けて本当に感謝しています。
今までにも、チャンスはあったんだけど、
もう一歩踏み出せなくて、
今回、ほんとに行けて良かったなあと思っています。

ベルクハイムも、近くに感じられるようになりました。
すてきな皆さんと過ごし、なおのこと、ベルクハイムの良さがしみてきました。
長い間、「やまざと」でみてきただけだったベルクハイムを、
目の当たりにして、感激です。
カメムシのにおいがしない！（すみません）
屋根、床、トイレ、水場、ランタンや食器やガスコンロなどの備品・・・。
そして、いろり・・・。
ワンゲルの人の手でつくられたんだなあ・・。
自分たちの小屋だから、とびっきり過ごしやすくしようという
思いの詰まった小屋なんだなあ。
そして、誰かが、訪れるたびに、
さらに使いやすくなっていくんだろうなあと思わせられました。
また、私もベルクハイムへいきたいと思っています。
そして、たきびを囲んでビールを飲みたいです。
「～の宴」や「小屋作業」にも行けたらいいなあと思っています。
いつか、ご一緒しましょう。

☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆

今年（２００４年）の５月にベルクハイムと高三郎に行きました。卒業以来、高三郎は３回目です。１度目は職場の先輩と、２度目は夫と行きました。どちらも時間切れでピークに到達できず、高三郎のハードさを再確認するとともに、頂上をなつかしく思い浮かべたものでした。

しかし、それより遠い場所だったのは、ベルクハイムでした。小屋作業の報告等で、次々と姿を新しくしていることは知っていました。行ってみたいなあと思っていましたが、小屋作業や小屋酒場との日が合わなかったり、ためらったり・・・。それの繰り返しで、気が付くと二十数年。なおさら、敷居は高くなっていたのです。

今年職場が変わり、「犀川小学校」へ勤めることになりました。校区地図を見るとびっ

くり。ベルクハイムも、高三郎も、校区ではありませんか。バスの終点「駒帰」の近くにあった駒帰小学校は廃校となり、犀川小学校に統合されていたのです。思いがけない転勤は、ベルクハイムと高三郎に、呼ばれたように感じました。

そして、４月のある日、ドライブがてらにと車を走らせてみると、その道の立派になっていること。「鷹巣トンネル」というトンネルもできていました。どんどん走っていくと、赤い橋。そうだ、この橋で、何度か疲れた体を休めたことがある・・・。などと思い出はよみがえってきます。そして、その奥に、犀川ダムがあり、ベルクハイム、高三郎があるのです。行ってみたいという思いはますます強くなりました。

ちょうどその頃、栂さんからお誘いもらって、ベルクハイムとの「再会」となったのでした。

☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆

帰ってきて、興奮さめやらぬまま書いたのが、上のメールです。

今まで「やまざと」でみていたベルクハイムに自分がいる・・・。とってもうれしい感覚でした。あたたかくどっしりとしたベルクハイムには、たくさんの人の手でつくられ繋がってきた空気が満ちていました。私も・・と思ってトイレの中ではずれていたペーパーをホルダーに取り付けたのですが・・・。残念。そこは、雨の当たる場所だったので、避けてあったのでした。そう簡単には私の手は入れられないぞ。先に来た方々たちのでっかさを思い知った気がしました。

煙は目にしみたけど、囲炉裏の火も人もやさしかったです。
その晩、私は、山の中に帰っていました。

あのベルクハイムで、また、誰かと会いたいなあと思っています。
今度、行けるのはいつかなあ・・・。

言い忘れましたが、翌日登った高三郎は、BH前泊でもやっぱりハードな山でした。学生時代に手に入れ、久しぶりにはいた山靴のビブラムは、ついにギブアップとなり、昔、松下さん（？）がしていたような針金縛り状態での帰り道となってしまいました。助けて頂いたみなさんありがとうございました。

山の開拓者たちを想う

１１期　青柳　健二

数年ほど前から、一泊から三泊程度の山行を復活させた。もっぱら小屋泊まりの単独行である。単独であるのは、マイペースで歩け、気ままに写真を撮ったりすることが可能な唯一の方法だからであり、小屋泊まりは、なにより荷物が少なくて済むからである。ただし小屋泊まりのメリットは、色々ある。相部屋となった山仲間との語らいも楽しいし、最近は小屋の食事も結構美味しくなった。生ビールや本格コーヒーが飲める小屋もある。何より、山小屋そのものが存在として面白い。建物の形にしても、手作りのような小さな小屋もあり、何百人も泊まれる大きな小屋もある。大きな小屋は、何回か増改築され今の姿になったと思うと、その歴史が偲ばれる。小屋の姿そのものに、小屋主の性格が現れている。そして、「この小屋を建てた人物は、なぜこの場所にこの小屋を建てたのだろう？」と思い巡らしてみるのも楽しい。

思うに、山小屋を建てた人物は、その山と共に生き、その山を一番熟知し、一番愛した者であると思われる。ヘリコプターのない時代に、山小屋を造ることは大変な難事業であった。彼らの、強い意志とあくなき情熱、先見性と野心、その山への偏愛、ロマンチズム。山小屋建設者は、必然的に登山道の開拓者でもあり、山の真の開拓者と言えると思われる。

そんな思いが、山小屋物語や山小屋の主の物語への関心となっている。北アルプスの山小屋の場合は、それなりにテキストが出版されているので、出発前に読んでいる。また、岳人や山渓にそんな記事があると、必ず読んで次の山行に組み入れることを考えている。

実は、山小屋とその主への関心は、山都松本生まれで、友人、近所の人、そして親族にその小屋主達がいたからでもある。ここで、そんな方々を紹介してみよう。

まず、針ノ木小屋の百瀬尭君。彼は、高校の同級生である。大町から松本まで電車通学していた。学習院大学卒業後、母の後を継いだ。祖

父が、北アルプス開拓史に名を残す百瀬慎太郎である。若山牧水門下の歌人でもあり『山を想えば人恋し、人を想えば山恋し』の名文を残している。針ノ木小屋は、大学１年の夏合宿に通過しただけで、その後訪ねていない。２００５年の夏山計画に組み入れ、再会を祝いたいと想っている。

燕岳の燕山荘は、家業（陶器店）の取引先であった。松本の事務所に集金に行った事がある。大正１０年に、有明村の赤沼千尋が開設した。気鋭の登山家でもあり、百瀬慎太郎と名古屋の資産家伊藤孝一と３人で、大正１２年厳冬期「針ノ木越え」、翌年冬に「薬師岳ー槍ヶ岳縦走」を企て成功させている。３０人からの山案内人と撮影技師を同行させ記録映画撮影を同時に行うというスケールの大きな登山であり、彼らの夢の大きさと実行力に感嘆させられる。二代目赤沼淳夫は、山小屋の近代化に力をそそいだパイオニアであり、山岳写真家としても知られている。三代目健至は、先代のパイオニア精神と経営センスを引継ぎ、燕山荘を人気の山小屋にしている。２００２年夏に、中学の学生登山以来４０年振りに燕山荘を訪れ、彼のアルペンホルン演奏と山の講話を楽しく聴かせて戴いた。

槍ヶ岳山荘の穂刈家は、実家の隣町の写真屋さんであった。中学・高校時代には撮った写真を現像に行ったものだ。店先に壮大な槍ヶ岳の写真が飾ってあったのを覚えている。初代穂刈三寿雄は、大変なロマンチストである。18歳の時に徳本峠を越え上高地に行き、その美しい景観に魅せられた。23歳で槍ヶ岳山行を計画し、運命の槍ヶ岳に遭遇した。そして、４年後の大正７年２７歳で槍沢に北アルプス南部最初の営業小屋「アルプス旅館」を開設する。さらに大正１０年、赤沼千尋と共に「大槍小屋」を建設。大正１５年には、ついに「槍ヶ岳肩の小屋」を建設した。雪崩で小屋が潰されても、耐えて復活させ、夢の頂きの肩に小屋を建設した執念とパワーには目を見張るものがある。進取の気性に富み独学で写真を物にした。ガラス乾板で山岳写真を撮り、それを上高地の旅館や自分の小屋で売るようになり、松本の家を改築し写真館を始めた。商売のセンスも抜群である。二代目の穂刈貞雄は、小屋を継ぐともに、写真館を継ぎ、山岳写真家として名を成しているのはご承知のとおりである。今は、元商社マン三代目康治が小屋を継いでいる。
今年の夏に３３年振りに槍ヶ岳に行き、初めて槍ヶ岳山荘に泊まった。新館２階の談話室では、穂刈三寿雄のガラス看板写真展を行っており、力強い白黒映像で、８０年以上前の今も変わらぬ山の美しさを鑑賞した。

この穂刈家の隣家で、足袋屋を営んでいたのが山田家であり、アルプス旅館の共同建設者となったのが山田利一である。槍沢に荷揚げするために、大正８年に常念乗越に常念小屋を建設した。さらに、一ノ俣谷に道を通し一ノ俣小屋を建設した。モダンな山小屋で、牛肉のステーキが夕食に出て評判を呼んだと言う。戦後長男

の宏吉兄さんが横尾山荘として引継いだ。今は娘婿の貢さんが運営している。常念小屋は、次男の恒男兄さんが継いでいる。ここで、兄さんと言うのは、実は母方の従兄弟にあたるからである。子供時代には隣町でもあり、良く遊びに行っていた。病気で寝ておられた利一さんの横で、手回しのレコードを聴いた覚えがある。今年、久し振りに横尾山荘に泊まったが、新装の風呂にはビックリした。内装も一新され、伝統の料理も上手く、若いスタッフの応対が気持ち良かった。常念小屋の恒男兄さんは、７０歳を超えた今も現役の小屋主である。スタッフもベテランが多い。大変な話好きで「語り合える山小屋」を経営理念にしている。薄くなった頭を守るためいつも野球帽を被っているこの親父さんを小屋で見つけたら、気軽に話しかけたら面白い話を聞かせてくれるだろう。

そして山田利一の長女良子姉さんと結婚したのが、北穂高小屋の小山義治さんである。この偉大なる開拓者と親族になったことは、私の誇りである。あの北穂高岳の頂上直下に
小屋を建てた伝説の物語は、ご当人が本に書いているので、ぜひ読んで頂きたい。また、一昨年４月に「穂高よ永遠なれ」と言うテレビ番組も放映されたので見られた方も多いだろう。今は、一人っ子の義秀君が継いでいる。私は、この北穂高小屋を「日本一の山小屋」であると自信を持って断言する。あの滝谷のすぐ横に小屋が建っていること自体が奇跡である。３１００ｍの日本一高い山小屋であり、小屋前のベランダからの眺望は完璧である。ここから大キレット越しに見る槍ヶ岳の眺めは、日本の山岳景観のナンバーワンであろう。また、北穂と小屋を愛するスタッフの気配りが行き届き、気持ち良い雰囲気に満ちている。クラシックが鳴り、小屋のスタッフでもある写真家の撮った穂高の写真が飾られた食堂兼談話室では、この場所でしか味わえない至福の時を過ごす事が出来るだろう。この夏３０年振りに、この小屋に泊まった。楽しみにしていた義秀君とは会えなかったが、小屋で職場結婚した早川君の暖かい歓待を受け感激した。義治さんの創った小屋が、変わらず見事に継承されているのを確認し、ますますこの小屋が好きになったものである。

北穂高に登る前に、浅間温泉の小山夫妻を訪ね、昼食を挟んで３時間ほど歓談させて頂いた。８５歳になられた小山さんは、腰がまがり耳がやや遠くなっているも、すこぶるお元気で、９月に長野で催す個展の準備に精を出しておられた。２０年程まえ山を降りられてから、本格的に始めた油絵でも一流の才能を発揮され、銀座の画廊で個展を開くほどの
腕前である。小屋創設５０周年を記念し、画集を発表されている。６０周年にむけて、自伝の執筆を始められたと言う。この日、３０年前に買い求め愛読した著作本に、サインをして頂いた。第二作がどんなものになるか、大いに楽しみである。画集を含め、三冊になるであろう、サイン入りの著作は、私の自慢の宝物である。

小山さんは、今だ自らの足で、年１度は北穂

高小屋に登られると言う。今年も８月末に登る予定だと聞いたが、台風が多発し山の天候が不順だったこの夏は、無事登られただろうか。ここで、紹介した山小屋の創始者たちは、何らかの輪で繋がっている。その輪の先っぽに、自分も繋がっていると思うと、とっても幸せな気分になる。山小屋は創始者から二代目、三代目の時代になったが、それぞれが創始者の志を継承し、それぞれの個性を受け継いでいる。私も、体の動く限り、そんな山小屋を訪ねて山に登りたいと思う。

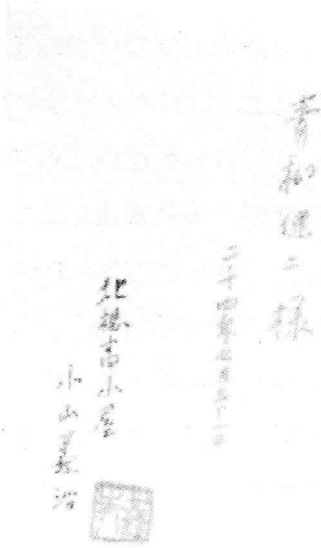
追　記

穂刈家と山田家があった旧六九町（現大手二丁目）は、大掛かりな市街地改修工事のため昔の姿を無くし、商業ビル兼マンションが立ち並んでいる。町内にあった「さくら銀行松本支店」も銀行の合併により廃店となった。穂刈写真館も、今はない。私の実家のあった旧西堀町も街路拡張工事が行われ昔の面影はない。兄が継いだ家業も街路拡張を機に店をたたみ、市に土地を売って、駅の西方に引っ越した。ただ、山田利一さんの生家跡には、従兄弟の中村邦雄兄さんが、音楽喫茶「シンフォニー」を営んでいる。この店で、膨大なクラシックコレクションを聴きながら、コーヒーを飲むのが、松本に帰省した際の楽しみになっている。ちなみに、邦雄兄さんは、３０年程前に廃止された一ノ俣小屋の小屋主であった。松本駅から松本城に向かう道筋から少し入ったところにあり、松本に寄った節は、ぜひ訪れて頂きたい。コーヒーの味は保証します。

［参考文献］

穂高を愛して二十年：小山義治著　新潮社、中公文庫
北アルプス　この百年：菊池俊朗著　文春文庫
北アルプス　山小屋物語：柳原修一著　東京新聞出版社
穂高よ永遠なれ　北穂高小屋物語：ＪＮＮ共同製作番組　青柳ＶＴＲ化

◎私の宝物



山小屋　温故知新

15期　舟田節子

情報に関して、ＩＴはまさに革命。ますますの加速に、個々の習熟スピードが追い付かず、一方、人対人の認知・親睦ペースは、そうそう加速・コード化できるものではありません。さらには少しでも新しい情報を…の価値観は過去を評価せず、個人のキャリアや達成感も、アッというまに「評価をされない過去」に貶めます。共同体における縦意識の維持は、時代に即応では済まない困難を抱えるようになっています。

ワンゲルに話を戻せば、メールマガジンの時代に、部誌ベルクハイムの発行はより難しくなりました。過去は過ぎ去るのみにして、小過去すらが不明、それが加速…。そんな時代に「昔は…」を語る愚かさを思いますが、活字になる機会に、小屋作業への補助金獲得他の経緯を説明しておきます。

ＫＵＷＶの伝統といわれてきた高三郎周辺活動も、平成に入った頃には沈滞化。①有名山岳指向による意識離れ②部の同人組織化による非統率化③山小屋の老朽化④城内キャンパスから移転による環境変化⑤カリキュラム改編による一斉休暇の消失…などの諸因があったようです。

この時代の趨勢への転機となったのは、平成４年晩夏の36期生蒲原君の劒岳死亡事故でした。翌５年①ＯＢ会復活②創部35周年行事の現役・ＯＢ共催③修復募金を経て山小屋大改修…が行われ、７年には①山小屋修復完了②月見の宴③15期桂氏の愁心碑改修。高三郎登山道修復の補助金の話が湧いたのは、その後でした。林ナカオ代表が、公募であって公募でないような補助金話をもちかけてくれたのです。その２日後のＯＢ会役員と現役３回生（当時は38期生）の懇親会にて、「部は慢性金欠、是非お願いしたい」の返事。予算が承認された翌年度、スポーツ振興課課長が５期稲葉さんの同窓で、稲葉さんに同行頂き、また尾崎主査が倉谷出身であったことから、きわめて順調に「補助金をいただいての高三郎登山道修復作業」は復活しました。４年がかりで旧道を修復。新道は、ナカオにも２度応援いただき、修復をみました。

また山小屋酒場は、補助金受給話のその席で、13期辰野さんからの提言とオヤジ志願を頂きました。その後、春と秋の年２回①水場作り②トイレ作り③石垣補修④梁補強⑤根太取り替え、床張替え⑥囲炉裏作りなどを行い、快適空間が生まれています。

すでに、現役時代より多く、高三郎に登り、山小屋ベルクハイムに通ってきました。

いわばすべてがＩＴとは無縁の、人のつながりや、汗、努力の中で進行してきました。山小屋がなければ、どれだけのことが消えていて、替わりに、どれだけのものが得られたというのか…と、思います。

さて、私は万年飯場のオバサンですが、修復メンバーもこのところすっかり酒量が落ち、量より質へと、ボッカ力相応のメニューになりつつあります。春にはボートが使えるロケーションも倉谷ならではですし、中高年登山ブームにも汚染されなかった静かな桃源郷で　す。思い入れだけなら、どこかで挫折していたでしょう。気負いが消えた時にも、残っているもの…それに気付かされる山小屋です。